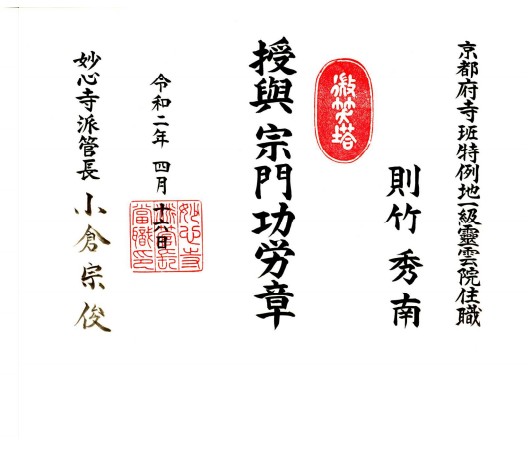


宗門功勞賞授与式

10月5日、コロナウイルスの感染拡大で延期になっていた当
 会会長・則竹秀南老師の「宗門功勞賞」授与式が達磨忌半齋後
 の10時、開山堂眞前に於いて挙行された。当会会長として20
 数年の長きにわたり、世界各国に出向かれること216回、日
 本佛教の敷衍、異宗教徒との親善交流に努められた多大な功績
 により、妙心寺派管長・小倉宗俊老大師から親授された。式典



には妙心寺派並妙心寺役員、靈雲派中諸大和尚、檀信徒多くが参列した。



式典は会長老大師、開山さま三拝後、管長猥下より「宗門功勞賞」職状並に賞状が親授された。その後管長猥下、栗原宗務総長より祝辞があり、最後に会長老大師から謝辞があり参列者一同、記念写真に収まり、無事円成した。

宗門功勞賞挨拶

則竹 秀南

佛天の御加護、開山大師御慈陰のもと只今は管長猥下より宗門功勞賞を親授賜り厚く御礼申し上げます。

総長様はじめ内局諸大和尚、妙心寺参務、靈雲派中の諸尊宿及び関係諸和尚、更に靈雲院総代、世話人、信者の皆様方、御多忙の中、御随喜賜り御礼申し上げます。

宗門功勞賞については、私の記憶では先師山田無文老大師が最初に受賞されました。



昭和四十九年(一九七四年)、今から四十六年前、江西宗務総長時代でありました。無文老大師については国の叙勲を、自分はお釈迦様から立派な勲章をもらっているからと御辞退されたエピソードがあります。その老大師がこの宗門功勞賞を最初に受賞されました。

次が、タイのワット妙心への支援を長年続けられた四国大乘寺澤井進堂老大師であります。この様な偉大な老大師のあとを追って同じく受賞は身に余る光栄で人生の記念すべき一頁を飾るものとして拜受させていただきました。

扱、海外への旅は山田無文老大師の伴僧で雲水時代から、アメリカ、メキシコ、ブラジル、ヨーロッパ、南太平洋諸島等への経験はありまし

た。特に一九九九年九月九日、趙樸初中国佛教協会会長より日中友好尽力者二世の会の一人として、同行三人で中国房山石経回藏式に招待を受け、今まで経験したことのない盛大な大法要と石経保存の佛教徒としての意義の重要さに感銘をうけ、自分が井の中の蛙であったことに気づいたのです。この佛縁を大切にすると大きな波となって中国各地、台湾、タイ、アメリカ、イタリア、スリランカ、東南アジア諸国、バチカン等、世界各地に広がって行きました。海外渡航回数は二十一年間で二百十六回、外国の賓客を靈雲院に迎えたのが三十四回にも及びました。その間、世界各地での災害救援活動、世界諸宗教と世界平和祈願合同法要、世界各地の戦争虐殺地巡礼と追悼法要を厳修して来ました。

その間のエピソードを紹介します。

本日は達磨忌で午前八時からの諷経中、達磨大師因縁の地を巡拜したことを思い出しておりました。南インドのカンチプラムの御生誕地から、海岸では中国へ出帆された大海原を眺め、中国広州ではインドから到着地に現在では寺院が建立されており、その寺を訪問し参拜。南京へ更に揚子江を渡り北岸の地で十ヶ日間滞在され寺(再建中)では、大師因縁の湧き水を有難く飲み、嵩山少林寺、そして空相寺と参拜出来たことを感謝しました。

台湾大震災の時、倒壊した各寺院を御見舞して巡っていた時、南投県の大寺院で一人の尼僧さんが倒壊した伽藍の中で大地にひれ伏して三拜、「この寺を代表して御礼申し上げます」と真心から泥にまみれた尊顔を向けて下さったので、私は居場所を失いました。

中国の北京では嚴冬の日、中国国家宗教局を一年間の答礼の爲の表敬訪問をして歸る際に大臣クラスの葉小文宗教局長がその薄い法衣では外は寒い、このコートを上からはおって下さいと、着ていたコートを脱いで自ら私に着せて下さったこの親愛の情に涙が出ました。

南京大虐殺記念館のなげきの壁にての合同法要後には、遺族の皆様が悲しみの思い出の中で、私達に笑みで答えて下さったことの真情に感謝しました。

イタリア・バチカンの唯一大聖堂の中で、異教の佛像を安置しての世界平和祈願合同法要を共に厳修出来て、翌日にはローマ教皇に謁見。教皇との抱擁の中で互いの人間性が伝わった純粹経験の有難さを感じました。ポーランドのアウシュビッツでは怨念の厚い雲におおわれて息苦しく、

いたたまれなくなりました。夕方の薄暗い中、二本の鉄道線路が恨みを訴え続けているように感じられました。

台湾奉天宮と妙心寺は、神月徹宗管長以来の長い交流がありますが、現管長猯下門迎の中一行三十余名が妙心寺へ参拜し、獅子舞いの長蛇の列で参集者を驚かせたこと、最近の出来事でありました。



この様な交流実現には山田無文老大師のお導き、管長猯下をはじめとし本日随喜の皆様、交流に参加下さった多くの方々、更に訪問先の関係者一同の皆様、佛縁、法縁にかかわった全ての方々の御法愛と御力添えあつてのことで、未熟者力が無くて一人では到底不可能なことであります。茲に深く感謝の意を捧げます。

今後、加齢が進む中で宗門の為に一層精進勤めて参りたく思っていますので御法愛、御心添えの程お願い致します。

本日は有難うございました。